



建築図書の分類が学生の進路に及ぼした影響

都市・建築学専攻
飛ヶ谷 潤一郎

わたしと工学分館との付き合いは、今から四半世紀前の学部2年生のときに建築学科に配属が決まり、青葉山に通うようになってからだと思う。当時、大学入学の時点では、工学部には学科や系に分かれておらず、2年生の進学時に配属が決定される仕組みになっていた。建築学科の人気は（今とは異なり？）高かったのも、1年生のときはまじめに勉強をした。しかし、専門課程に進む前に建築の勉強をするには、どうすればよいのかわからない。もちろんインターネットのない時代で、長期間の旅行もできない貧乏学生だったので、ひたすら読書に励んだけれども、購入できるのはおもに文庫や新書などに限られたので、しばしば図書館を利用した。1年生のときに川内の図書館に通っていると、やがて建築関係の図書は絵画や彫刻の図書といっしょにKの分類であることに気づく。建築は工学ではなく、美術に分類されるのだと。

ところが、2年生になって建築の専門科目を学びはじめると、建築構造力学のような工学部らしい科目も当然受講することになる。工学分館では建築の図書の棚に、確かにそのような工学関係のまじめな教科書や参考書も並んでいるが、全然読む気が起こらない。むしろ美術書がないことは、建築の専門科目にそのような教養は必要ないのかと残念に思った。それでも2年生には普段の居場所がないので、読書をするためよりも、自習をするために工学分館を利用したように記憶している。3年生になると、製図室に自分の机が与えられるので、講義以外の時間は製図室で過ごすことが多くなった。さらに必修科目が増えたため、読書を楽しむ余裕はなくなり、工学分館にも川内の図書館にも通う機会は少なくなった。だから、4年生の研究室配属で建築史及び意匠研究室を選んだ。しかし、研究室には日本建築史に関する文献は充実しているものの、卒業後は他大学の大学院で西洋建築史を研究しようと考えていたわたしは再び図書館のお世話になり、その願いを叶えることができた。

教員として戻ってきた今では、学生のとくに比べると工学分館の利用頻度は減ったが、工学部の教員のなかでは多いはずと自負しているし、学生にも図書館を活用するように指導している。けれども最近は留学生も多く、また外国の大学では一般に建築学科は工学部所属ではないので、人文系の図書や外国語の図書も増やしてくれることを期待したい。

